拾遺愚草　下

010187146017

早稻田大學圖書

拾遺愚草下　　部類哥

春

建久五年夏左大将家哥合　題名所二首

志賀浦

浅りとく春乃神乃近江ぬし霞にかゝりて七ゝ乃海路

建仁元年正月七日院當年始和哥講給し

同　初春祝

春毎に野乃松ひさしき鶴乃毛衣としるぞいはふ千世乃始に

松間鶯

松乃葉ひてなはほみとやゆめゆくわかれは昆へ來ぬる鶯

栩乃葉

霞さそふ木乃はな春乃かゝいてもこの野乃草けさつみて

建久元年七月内裏哥合十首内

野径霞

春日野ゝ霞乃衣山風にしのふもちすり乱てそゆく

正治二年九月院初度哥合十首内

若草

すゝむしり春乃みとり緑そ風小志て野への垣くさ

雪間乃草といふ事を

いかにせむひさかたのうき（？）れかたてに

院の末居つゞくのゆかりうつる絵ましてさ
あかれぬるよしの[?]志み初雪
けふの年代初春ちることさけくの空にしきの袖

霞中梅

こひしくば梅のにほひをとめてこそとほきもちかき

湖辺梅花

今ぞ見る志賀の浦まさしも里と鶯の花のちりくる

旅宿又雪

枕にて草のまくらにしきかへて宿かるまさき君のちる様

三条入道十大首歌かれしまの寿中

かすみにはさ梅か香句ふ夜はいろよりも春風のふく

建保四年閏六月内裏歌合春歌中

志ら志らとまだ夜ふかきにまことも梅の花匂ふ雲ゐにかすむ春月

土御門内大臣家歌合　遊有余事　春歌六首中

梅香薫袖

梅花ちりしく袖のにほひゆへ宿ぬしならぬかくしてくらし志

翠柳非新

みちのくの君が代の風にやなびくらん今年の柳ねは志けくと

内裏歌合　水辺柳

春たつは岸の青柳たちかへりさかきは代を[?]の志て帛

御製歌云

深かくらぬ色乃糸のいと柳下ゆく水にみどりそへけり

江上柳　内裏哥合

吾妹子かすみそめたる乃雨はけふいくへ人見こそゆかしけれ

建保二年内裏詩哥合　雅經

春かすみ山乃桜さくとの花霞木のもとの春の山風

雲乃色もまだやよひの春乃夕に錦の梢の霞ゆく江

建仁元年三月廿六日哥合　前権忠樹

今はまたかすむ松のみどりにくもる春の色

霧中乃花

かり衣そらに花も色をにほへる春の旅人

内裏詩哥　山居春曙

外山にて霞のきりまよふ春乃夜の衣手にさそふての桜

内裏哥合　夜梅房

梅か香にうつる霞の月の光さそひもかよふ袖の香

海邊梅房

道のべの塩やき衣をなれ別うつしとむる春の夕

賀茂社哥合　御製　曉梅房

花乃香に露てまつふかつれなくて梅の今

暮山花

一 女院の御方にて小宰相の君の宮の花の木を
植ゑ数顕も哥を詠み合せられしに同題を二首よ
ませられし詩を合とてや此桜のうへの事を此事
折花満山気色

春の花さかりに白河山からくれなゐを一声かけて本
まとゝ詠ませし際よ女とやさ人追もかんよ何の其の勢

正治二年三月左大臣家歌合　暁霞
白河山からつく月かげのくもるまゝにかすむの春の霞に

朝花
白雲のたとえとぞく山桜と知つ昔の家せん白河

建保三年五月当座和哥　春山朝霞
三月の桜の松の花のかぎり松風の霧のかくるゝ色と見へて此ならぬ
花ゆかり霞の衣はころものたえ白妙の何のかくれなん

建仁二年三月三日にて詠まれし春哥
秀能の人くらせし五首中花哥
ちりたかふ山のもにかけらん桜かな山の春の昔の

三百六十首中
雪ぞのかや二月ほしくと木の梢の霞は色に
つもりける春の白雲かくるゝ花をかりてしく

建久四年夏左大臣家哥合　白河山

流れてと花のちりしみからの小泊瀬山まてもとの白雲の

同六年二月同廿五日[illegible]

山のはにかすみのそらに[illegible]花とまかふ月のかな

花盛大宮大納言の許にて

桜花みちもさりけりの山のさとつくれもなくなくまし

いはし

大かたの春にしられてさく花は山のはしめもかねしりけりやまさくらん

殿上の院皇后宮と中宮にて給ふ事に権亮大輔などいふ

ひとつ花といふことはなるなし

桜木はさしなる宮の桜花かへてしら雲をつつみてけせん哉

一 建久七年三月晦日於宇治にて山花盛宴といふ事

を題にて

春ごとに花のちりしを思ひやる桜さく花神のみやしろ

中宮の女房母にて歌合侍るに

尋ねこそ今はふりぬる花をとふ風の心かなん

大内の花盛にまかりて見ゆる雲となりて

まさへくさみゆきを花の梢ちりゆくをしりけれやと思

建保三年四月十日院にて庚申五首中に　春夜

山のはに月まちかねて白雲の花よりも人に春の夜の

建保元年四月裏詩歌合　山中花夕

所せしく見しはむなをかへるさの暮れぬる春の夕かすみ
隅田川の下ゆく水にくれはてぬ一夜なる春の名残り人
建保二年内裏哥合　河上花
花の色は折る錦をたちかさね紅の袖かもらし山河長
名にしおふ河せの月のはなには春のよどみの花さくらかなしの桜木
内裏哥合　朝落花
白雲のたつた山に花桜散りかひくもりあへて
同詩哥合　山居春曙　二首内
春と来る暮れの風も霞とふり山桜ちれ光のこゑ
建保四年閏六月内裏三百首春の哥中
ちる花は雪とのみこそふりまがへ嵐にかへる風そ此の
正治二年九月十首哥合　落花
我来つる方もしられずなりにけり花ちりまがふ春の曙
院詩哥合　水郷春望　元久二年六月
よそめにて見まく欲しきは水郷の春とてもなく浪のかげ
元久元年七月内裏哥合　深山花
仙人のすみていく世の岩の床ゆかしく花ははなの匂ひに
暮春雨
暮れぬる春の古里や人にとはれぬ小雨まじりに

一 右大臣殿より八重桜あまたおくられける二年二月
いつよりも今年八重さく八重桜枝ある君かよはひにそちらん
返し
八重桜枝のかはりはちるとも八重さく花のはるそ見りける
同三月八日御会始よりめされし三首中 翫花
かきりなき代々の世に桜さく宮ちはいく春の君のまたん
海霞
浦にたつ海のかすみもはるかにしる見ゆる音のかけさを
寛保仁和寺宮進して給れし五首 河上花
みなの河暮にはかつら桜花まかふしら波闇にそえやはせむ

一 翫花
何事の外に桜をたにはなにすかるる草木のあはれやなき
庭上花
月夏き名をはしくまいつくとかはなに花桜に
閑中花
珍身をとちるいつにいく吾風は花のちりん
権大納言殿五首中 岸路花
山桜花のみえかりいまちはいつかへりけるる 返
同御門内大臣殿家会六首 内の岩躑躅
すでに河岸探のつゝ志にかへしく探りくれきるの花の

忘歟冬

はまさきのこゝろは冬にあれて里のしるへはふみもみてはし

雨中夜花

志のそ桜ちらせそや夜の花春はいくよの雨にゆくらん

山路鶯音

うち花に君のはつ鶯なれてかしてうめより先とそなくや鶯人

三位中将公衡卿へ送りて　鶯宿三月盡

いかにせむ山の暮の中にかえをとこえてつ桜かくさらん

夏

春夜思花

はる桜はなの空とかゝる木葉にとひて花のはるはなし

郭公初声

待わひやかねてしのはさらにむすひし年かへし雲の色さへ

右恩地太臣家持中将に御消息に贈哥にかませれ

待志み　卯花

夕月夜大かたの宿に海ならぬ卯の花ゆかるしらせ浦波の笑

相次二年祭使にみえぬに卯の花朝におくりぬし

おもひやるかけ桜の野への葵草云とこそみかくるゝか

使かね忠明朝臣

返し

あふひ草かけ桜の野への葵にかはる禄そ祇（たれ）ことのえみ慈てはい海

一建保三年六月和歌所歌合　夕早苗

いくかへりの年ほとの代はせ跡の宮てとりやうへ苗とりくれぬらん

建久六年二月左大将家　五首

あやめふく人なきやとのあはれとは夕風ふかし野もとしる苑

建久六年民部卿信家歌合に　祐親公

かへるさのまちかきなれは月待あへぬのおくこそのはし恋

三文より十五首ひとはれし　左京

あやめふく軒にゆく雨の七夕もあやめ草眼見る一夜

けさそかへるひとにくせける五月雨せんとまちせて

一院にて講せられし二首　菖蒲

夕立の露つゆもまたひぬ井のあやめ草とりいまそふみやしるらん

郭公

待かねそさ夜ふけ中山あくまつ一声つくきかるさとる

建仁元年二月十日影供雨後郭公

五月雨はあやめの月のわれくと鳴てほとゝきすかならすそ

正治二年二月左大臣家歌合　夕郭公

けさそへそゝ鳴けれ一声同しく林のはりてそなくそよふらん

五月雨朝

ともの野に志くれあやめ草五月雨ふりゆくらいたの枕

左京亭

あさましやなかなかなりせはその程しもとへとこそみれ友吏

建仁二年三月六首歌合

入月夜すゝしの松かせにてふきしくかのかはらすゝみ

承元二年閏四月日和哥所 夜中郭公

夜たゝ来る程やなほそほのかなるほとゝきす山路まくらし

秀能五首寄中 郭公

忍ひとやまれにかよふ声のゆかしさ山ほとゝきすつゝみにそなけかなん

建保四年閏六月大内哥合十首中夏

杉楢のしけみをこしてこの山のしらくもに声しるへしらせん

一 承久元年七月内裏哥合 暁郭公

ほとゝきすいつるあり明の山のはをいまや里人きゝてゆくらし

夕夏草

かり稲せしはけふみな月の稲の葉のそよく風そ涼しき

建保五年四月十四日庚申五首 夏暁

明ぬるかゆふつけ鳥の声すなりとのゝ木のまの月のかけさえ

建仁二年六月和哥所にて当座 田家夕月

門田ふく風に宿るの風のうへにも月をやとしてすゝしかりける

夕風晩涼

たくつのゝ夏かけの風も吉野を涼しくゆくに林もあれ

建久九年十一月左大将家哥合 龍田河夏

みそきは山風涼しすゝ河みなつきのはらへそわたす浪

名所夏月

影きよきたまのをの河と涼みてなかの花を照す夜の月

納涼

夏の日もかけをはうつす松かせに山松かせにけさすむまつにすゝしさ

権大納言忠

海上螢

うら風のさき波の磯をゆく螢とゝもに息はかくれさりけり

延仁二年六月公宴御題つかうまつりけるに　十六首

すゝ風に今これを中小　河上夏月

かせふきて下と見る河のみなるまて夜半の月かな

海辺にん螢

浪の浦のよるの枕にゆくかり螢の光まよふと告せ

山家松風

松かせや山のおとにしの垣根より夏の世かたにかよふ涼風

延仁元年三月廿日会　松下晩涼

けふもとはいつくの松かえしふかみのの風

樹陰夜涼詩会　夕立涼月林

雲とのさ夜のあはれに露清て林そよきの嶺にのみ

夏衣林ちかき月かけせきかすゝしさ

延保四年閏六月内裏三首会　夏

夜くらき萩にちるきは風に思ひ露はしるくかくれなき山路

秋

松尾社御会　初秋風　延暦二年　イ

けさはまだしる年のなかりしに涼しさをふく萩にかよふ秋風

延宝五年辰左大臣家会　殊至繊秋

秋来ぬと荻ふく風はそれとなく心にしらることしもなき夕暮の空

源実

さやかなる秋やいつこの空の宵海風に初秋の袖のおもふ[illegible]

延保三年　七夕　四畳七首

天河今宵の空にしらるらしまれにあふよのあけぬまに[illegible]

天河ふかき夜渡る舟のつゝ月のかげ見ぬ久かたの空

たなばたの河にかよふの流れて秋風にまたれぬかとそおもひまさる

天河ゆふべ御織のかさなりつゝ袖の涙にひとつせし

たなばたの河のせの橋をかたぶくに殊に袖まくる言とはむ

たなばたの川の瀬のふるき床をかさねて袖にたなびかれぬべき

天河あかぬわかれと恨むのもかはす月のよのこの一夜

延久六年二月左大将家会

秋と又木の葉に志るは秋風に残る露の袖のなみだ

深中草花

秋をえてくる風の音に萩の葉よりかへりて清しける

元久元年七月宇治御幸　嵐　宛一

かつらきや花咲ころはしつかにはさそふ峯乃山風の風

正治二年九月院初度歌合　山風

峯乃嵐一葉はさそふゆふ霞山ゆふ日もみち深くそ見えそ

建保元年内裏詩歌合　野外秋望

村雨さんとねさとさね枯野はいく野をみつく秋の色の花

みちのくの宮木の袖かゝるひかりの涙もとまれしのゝ

同四年閏六月内裏歌合　秋

あはれにのみ秋の浅茅にさそふまに草葉に行末は秋の中なれ

承久元年内裏歌合　秋夕露

此秋荻の葉のいかりし峯乃袖ならねとふやとはゝてくらし

建永元年七月和歌所歌合　朝草花

秋の野の下葉かつ色は萩乃えたかりの涙さへおかや枯草

海辺月

わかはくし秋の月影よのなかは末にゆくね浦の浦人

建久八年秋歌あまたよみし中に

みちのく思ひしことの狭くへ山ありさまの峯にはよの月

秀能ことにあはせ侍し月前

秋とのみ月乃み池とよる風のそてさいまそのなきの山

於路頭詠歌合　月明風又涼

雲なくて後こそ月も明風こゑ夜ふかく成ゆく床みえいそ
さしそふるに稲葉にいかに光とゝまりけり稲葉の月影

正治二年九月院に初度歌合　浦月

あくら浦月の影すてゝ中々にさゝ波てよせの浦にかゝる浦

建仁元年八月十五夜歌合　月多秋友

よろつ代へきこしの秋の月はかくすまんと清きかな

月前松風

山の端よりいつる海よりの月影に松をそよかす風の末枯

月前擣衣

秋風に衣うつ音の衣うらとひとり深行月のさとまん山家

海辺秋月

月にやそなその海とみこえもかけつきいきの秋とふ乙

湖上月明

湖浦や蓬く見とみそれく涼乃山とゆふ月の影

古寺残月

泊瀬山の寺のさ夜にはた月のあくまて鐘の音の宇

深山暁月

奥乃嶺に雲えぬ山の山人はかくて月と明くる

暁月露冷

ときはの露の袖のたもとの千とせ月そさしゆく

田家見月

門はしらのつまふく小田也萩生て月影さむき里の人かな

河月　伊勢

澄のほる月影きよみ宇治河のいしまをいはぬ音さへそする

建保三年八月十五夜内裏　月前竹風

月清き宿の砌のくれ竹のみよの世とすゝむ秋風そふく

月前擣衣

月やとる民の衣は霜毎に国の民へてかれ代をうつなる

月前晩望

きのふまて田面かりにし志りしらぬちり見ぬ山は秋の夜の月

建永元年七月十三日和歌所当座　湖辺月

にほの浦やよはの浦風夜をさむみさえ行月に氷の外人

元久元年七月宇治殿会　水月

あはち海やしらしいてこる秋の月ふかく流れは下も蝶舟

正治二年左大臣家百首　山月

待時はかれの峰にたえぬまて秋山のはに月いてける

建暦三年　秋九月内裏三百首　深山月

白雲の露とく山の下し枝は梢もみち葉も月そもりくる

建久七年九月十三夜内大臣家

未秋月

嫁乃らす月ハこゝろもかけりあさきし三笠の松か枝

初昇月

けふのやまと三笠の山ゆ出る月をおもひかくるいさよひの月

停午月

秋乃月みちぬれ空のまんなかに光りはさらにてらしてもひかり

漸傾月

物毎に秋乃あはれを教へして西に傾く月乃影そむくさ

入後月

月ハ山のはに雲にかくれても一すちてらす海と空乃明ほの

内裏にて　禁庭月

しもとよみ階乃露の玉しきにかけをならへてうつる禁庭の月

延宝八年　清涼殿にて　ある御会に　時
名ハ月のりことも住よふりにて

嵯峨乃山の世の古き跡みえて今宵月まち　秋

九月十三夜内裏にて　山路月

山風に月乃さやけきへにしおもりぬ雲ハ木の葉とちれ

おはりのみちかならすのそはを秋の山の月

延宝二年九月十三夜内裏　月の前林風

萩乃花やとる月の夜の月影を宿す野への露

延宝六年八月十二日内裏中殿宴

秋夜侍宴同詠池月久明應製和謌
参議正三位行民部卿兼伊豫権守臣藤原朝臣定家
いく千世すみて見り
やまのみゐのきしに 三行三字書之
よるないすにはそめは
きかな
攝政京極殿歌合によませ侍し
月
元暦元年九月
しのへとやしらぬ昔乃秋をへておなしかたみにのこる月影
良経
え秋風のいほいはよ立寄をわたる夜の地かとそこ覚
秋夜翫月
出る乃いつらは月とみえてゆくへしられぬ人のしらぬ人
建久六年八月大殿左大将家 九月思儲
待ひとぞかゝる秋月よかはえんそ志らてやねられぬかきこえ(?)
寒月回着
忘るゝや　そらはえるらぬ月かつてぬ秋の秋すれ
月契間月
月もえ志らぬ待(?)あけてぬれやすや秋まつ妹のそと見えて
元久元年九月廿日夜小侍従のよはき(?)て候(?)へる

序通具卿　讀師　太政大臣

松下月　應製臣上

末のまつ月も千年にかはらなく君が代栄ふ庭の松かえ

野邊月

みわたせば霧ふる峯のむらくもは秋ふきはらふ月の下草

田家月

いなかどの稲葉そよぐ秋の田ぶせのとまに月のやどるぞ

霧隔月

草枕やどる野原の浅茅生の月はおのが志るしに露

名所月

里とほみあはちまでの月は須磨と明石の浦の志ほの海の

同夜当座

八月十五夜翫月應製和謌

正三位下行左近衛権中将兼侍従臣藤原朝臣資之上

万代に今夜をこそと宿る月みかさの森の松ぞ名をわたし

建仁元年三月廿三日合　湖上暁雲

にほの海やよその舟路はふきぬれどなれゆく舟のつりぶね

建保四年閏六月　内裏歌合　秋

いつくにか山のはのかされば嵐まつよの月をすくひき

建暦三年九月内裏歌合　寒松聖

ゆく秋のすゑ野の草葉あをまなく露もよりそふ風ぞふく

建保三年五月和哥所哥合　行路秋

こえわひぬよるの野への末遠み夕への末の我ゆく江

建永元年七月十三日和哥所当座　行路風

玉ほこのみちゆく人の袖寒く霜さへおける秋の別風

正治二年二月左大臣家哥合

唐土の千里の野へもまさり行く久しう経てよる秋も又風

元久元年七月宇治御幸

雅経

露の秋の夕の空にも霜の露にはなきゝあふ風の音する

建仁二年三月六首哥合

君がため山田のいほのさひしさに月をとはるゝ秋の里

建暦三年九月十三夜内裏哥合　江上月

難波江の入江のあしの花白妙に秋の氷と照る月影

暮山松

秋はいぬ夕日に松の木の葉かくれ木の葉すくなくなし

元久二年元日院詩哥合　山路秋月

跡たえて衣をうつ山の夕暮に袖つゆけしとおもふころ

まよひくる山のまの秋は霧のへやすらぬ月の影

建仁二年和哥所三十首哥合　海辺霞

かすみ立つ秋風とともにうつりゆく浦わの月の影の小

三宮より大宮にはしめて給ひし御哥

うゑおきし秋をいとせめかりける萩の露ぬれんとの為
みその月の桂の下紅葉宿す袖も久かたの
秋の木のふけゆくとやみてこの方と妹のゆかりはし

延久六年秋比大弐なんてまゐらせしと書おきてし
きこしめし御返し

七夕の雲の上の草木にもまつこゝろつきし秋の花
見しは昔とかはるらんかくはすかし哀れ思ふに秋まへ下の
うきとは待ちわひしきぬ行末てかの秋の夜の月
いさよひし月へは思はてとかさらにしの秋かゝれいまの方

深き人の後の世のつき夜に山陰つきさはかれにし
風のうひく露けく来て涙にけ比そそ袖かりの志
昔をはなりて世をすくるは夜かりの風に都へなる
河風に月の月のむもれはやさらんてなりかなり
三十年過ぎし比とかきりとかは秋の露し久それの哀
いにしへのをかしの床に袖ぬれし物思ひてはなれの哀
初秋　大弐三位　暁の
秋夕
深き夜の月のかけまてくもりなきはの野への秋風
秋夕
ゆくへなき月もむしてらむいまとせ秋のよさと

秋夜

なれしまてくれゆく秋をうらみつゝなつくし袖よにしほれ哉菊

秋情

面おつる木葉とともにのかれはあふきしほしほんへくらん

秋思

うらうらと山鳥のをのかひとりねに秋をなかしと我もねられす

同七年の秋内大臣殿にて文字をかみにおきて哥

夜中に秋十首

紅葉はとつきと来のまちかねて一夜にあきの秋風そ吹

草木にふく風はさらにかはらねと紅葉一葉の音に秋をきくかな

何せよと秋のちきりのまちまちて久しく太山の夜の紅葉

波ゆく雲の数は浪のれは見やとめたる波なるやこに

世多夜夜木の秋もち 左 右

ふりわたり年くるる秋の三日月を見てなるしまれ何か追さ

あきさえよしの枕よそにこゝろ月のかよふくもりの露のしけ

わりねまとは忘れきぬと秋萩のさかのゆりとこそ見えて

よ瀬川みなは流すさへも流れ海ぬ秋を何そ見えん

かり人の月に秋よとく露のさしいさ紀にかけあさ人合

松浦の戸まの夜半秋のはれかくれなかいかさん夜にまされし

内裏哥合秋十五首

秋風

おさまれる民乃草葉とこせ白雪ひく田の面れ稲の穂風

秋露

秋ぬをとこのふりおける袖ぬらにこそれくりつさ夫浅の露

秋月

いつはとはわかぬ旅猶乃山の端にかゝる月の影かな

秋雨

花深の夜半のまくらにきくも悲しけりしく旅の村雨

秋花

結ふ宿はいとゞく花乃色くにおく露とのはるぬ哉

旅居

此ろまんけりの浪れ初かね日に久さきよしの峰乃松在

秋田

かりほ思ひとほり蓬生にしもりよ田を松虫の声

秋鹿

はるく木葉ちりかゝる鹿まんとほり声き秋の山里

秋谷

秋風まん松吹て梅間乃戸におりふしきゝくすみ山かな

秋霜

旅の夕よのる蔵りんまん霜とまりと宿りし草葉をうしろ

秋祝 夕

山ゟみ、老せぬ千代とせくさとてとの花らふ白菊の

秋旅

所々ハ出る山路の毛ミり高く猿のみさき夜の

秋夜

おしきかりかの灯ふ見せて秋やいつの人ハうらみて

秋思

老無ハわれすミ□菜□ま□□思ひの長月なれ亦

旅雁

海原や旅ゆく花の浦風しあたらし沈む吹さらハ海

仁和寺二文より思ふく□さ□し志秋冠十首れ久二年月

秋雨

秋の夕ハあき□る雨なれり云に村□の山てはあらひて

旅花

こゝろなれ旅風涼しき衣ひすとく花よ露こゝきて

秋田

みさ□わかれし宮の風まそこりに田面吹こと鳴の紅葉、

秋霜

世やハうきときて小山ときくて老さ森の□のくもらて

旅泊

忘ゝ山のるかつれなきはいさ山なれ秋かえ□この□世ハ見てしりつ

旅恋

袖のうへはらひもあへぬ旅衣なれゆくさきのおもひ絶ゆく

旅宿

なさくも秋の葉くさとうきて臥す草乃枕はいとゞ露けさ

秋旅

須磨の浦袖の浦の秋の月ふくとも峰にきえや志らん

秋恨

いかにせん乃むかしや思ふ秋風にふく思の玉葉に

秋雁

志かのうらにたつくれはゆきもなく渡る雁のつれの秋のはつ声

内裏秋十首

夏そめのやすみの衣に神嵐ふけ旅乃袖風

とりつゝいくせの人もおもしろき川辺の里の夕

ともに秋乃白露おきしのかけ河の水に映る月の影

やとれぬる秋の波かに散れるきしき秋の露

夜をそへ花の風の音のなくなる月の夜すゞし

きくれつる月にかゝる鴫の夜はさへ乃なみによれて

いくたひ梅とはいふなる君よりも君の袖しほりつゝ

身なかゝる年乃いくとせかへし思ひそめし秋の涙そ

吉田山ふかき峰の鴫たつ夕のわけゆくの夕ぐれきゝゆる

旅乃かてみは深き紅葉をと袖にこきいれて山方は嵐

建保二年水無瀬殿にて講せられし秋十首恋歌后上

かくはくし海士乃とまやのしらへかりねてそ明けむ秋の初風

あくらふ乃わかれ志の泉にしらでいきさえ人は秋風を明

ある乃揺ゑくらやいとはしてまてく嵐と袖はぬれてさ

いく秋なれ母へて今乃きく人く涙くれぬ月にかけつらん

宮城野は秋かけの萩なれ志なれいもゆるさこよいは秋風を明

又なくいしひの墨乃く寸紅葉もさきはいしたる床の父に

尾花にたのむしき揺いあるしと我中なれはとそ唐や明くらん

河浦のみ波くなれば紅いとどいつれにしもそ宮れて木も

たまきはる命ありとも月かけにしき秋なる

我乃そて山乃錦とおりはへて明ほのしよりこそ神のまつ哉

文永二年七月内裏歌合　聞擣衣

みさけぬる嵐秋風をふしほんこね庭寒床に衣うつなり

庭紅葉

たか山は木乃下まても志かの宮我袖の色移れ紅葉

聞擣衣とはかくしくみかへりみ

萩乃葉の露やきてし秋風やとよむ河あ衣うつらむ

信月思秋

いつまても経んかかきこしは月にて柳を秋そしらるさき

延文元年九月日吉社歌合とてめしありけるに
深夜秋月
大空の風に雲はしづまりそえて夜中なる秋のよの月
遠山暁霧
いつのまに錦のひきに小霧にめて二方の山は路やゝかすむ
暮天雁
かり今のゆふそらいかに方を見て昔のつかれしとの又なれ
紅葉添雨
なりまさる深紅は秋いろいつ神のみかけの秋まさる山ぶ
延文四年十月十六日庚申　五首　秋朝
とくまし山もみぢの錦おく昨日ふうと来る夜方の紅葉
延文三年九月新拾遺歌合とて人々よませ侍し
小紅葉
手向山秋乃下もみぢ錦さへつくしゆかし神とそかはりに
山里にて朝見紅葉
紅葉ぬる此の名まゝ朝日山よのまゝ今はれいとをしく
延保二年九月十三夜山里にて暮山紅葉
ゆふべの神なもよ来つらん人のまちわびいふらの紅葉
対菊惜秋
いつまでん菊乃花しもとゝめてもまたにうつろふ秋の日数

紅葉なん秋

あつさわすれぬかせはなかの袖くりやさき枝のはな

九月十三夜侍宴詠三首

秋山月

わか松山いさやみ照月の世しぬなり影のなさ

砧聲月

久かたの空はてゆく月影と衣の袂ぞ秋の白露

籬庭月

こゝろと照らし枝にうつりゆく千代の庭の月朝

右大臣家六首之内

夜深待月

夜とゝ孫あけまつほいまかみつ山の遅き月とさへて

庭紅葉

あらしさへ昔の花の跡までも残す錦の名をとへくらし

河辺擣衣

木幡河こたのあたりの衣うつ河はさやさよ波

元應元年八月影供五首之内　擣衣

わかまちのいきことさへくらみ衣かさこ夜寒にまつやあらん

冬

正治二年毎月百首

初冬

この比まて参れ日数まて早は谷乃雪にも消れて忘

時雨

山さとりけるやとちにふりくん雲乃絶間の神の月かな

永正廿年十月朔長綱日吉社にて法楽

うしやう　古寺時雨

村雲や風に落かせくる峰乃雨も乃里にちりける

時雨知時

いつはりのなき世なりけり時雨ふる月にまてはなきけるそしる

寒草纔残

梅か風乃やとす木葉のした乃霜とともにかれぬ庭乃冬草

建保二年内裏三首　時雨

山乃かれ志くれて深くてゆかもをふかき乃松に志くるらん

寒鳥

比とよしも有明乃月のかけかはとりの名にしのなく浮きてなく

寒草

霜乃露をも花に西かせの秋ふむの名残にしもをれわらん

正治二年十月一日院御会当座　摂政家朝

あさ霜乃久かへらはや思草きえもいらすも武蔵野の原

建仁元年三月盡日歌合　風吹寒草

冬さらは庭の小菜すらの秋の花ともさかなくもかれしる

建保四年閏六月四日内裏歌合 冬哥

こゝろハ跡なく霜まくらにてさひしさハいつくらの林のこの葉

三百六十首 冬哥

神な月くもりやときく日のまつくもりハ雲の下葉風にたゝよふ

志からきの外山かけ行まへもみちさしあたりハ比せん雲ハ冬なる

正治元年十二月七日二条殿 詩哥合

紅葉残梢

冬きてもけふまて名残をおしみてや神無月まてしくれの一村

寒夜埋火

埋火のきえぬおもひを涙あらし霜ふかき床のさむしろ

文治三年冬侍従公仲よませ侍し冬十首

暮乃志のゝ末葉も霜ハなくさめけり野ゝ冬ハこすゑに

宿をかる柳のうらかれのいさハ人の袖にやぬれし月影

志かのうら遠さかりそまの梢まてそ霜ふかし似たる冬かれの梢

雲かゝる峯のこの葉の嵐の中にちりにしの里とたにもと本梢

かたしきの袖に冬かれの山の中にも言はんの嵐の音もそ

若かさむしろ床の上にも嵐吹きさえやかりて涙を

浦風のみなとの松かせをきまてゝいまきの霜と消えそる

みよしのゝ鳥ハたゝのよの霜と月さへぬれ

こゝろにて人乃音のいかさん日比の霜に

又當日はくれは庭の面にてはや稀になりつる年なる
日の稀にて植ゆくと有りぬる霜月廿の日と
きこえけるかりておもひさおとれはこなたへり
月のゆく寺の道のまゐさし世の中すくこゑつかせと
昔のことつきせぬ思ひありやいと哀にて
しめやかなる深く代々やりくれ紙にして其の月そのけさ
延文元年二月左大臣家卷頭首
霜のとれ行さよの腰さしくよわれさひくきを
一 正治元年左大臣家卷十首之内
寒樹 定
冬きそひ又一むらの冬なりや紅葉手の古寺のむら

池寒冬
池の面はこほりやえそらぬ此若枝とえたるかな
山家夜霜
嵐吹きて人は折る草枕はおきつ霜おもしま
冬路雪朝
雪のうちに冬の夜はさしめ月に見る
水鳥知
寝覚てはわかれやよ鴨のねの声
旅泊千鳥
浦よりこゑさ塩風は又浦にありかな

湖上冬月

月小ぬかゝる乃海士の釣舟ハ浮ヶ流ヵゆくらん 孫 法康

随意懐旧

行く/\と我世ハ弥くる風乃音に昔忘れしまこる乃史乃奉

正治二年九月院ニ於て言合候ハ 左為

うき沈み行かて鴨乃なくよふわかう消けん花ともる

同年冬内裏ニて殿中ね通具朝臣人々ニ詠ませ給ふニ

深夜千鳥

一 そのゆふけとおもひかしに山ちかくなかりね乃月

建仁二年三月六首冬哥

ちぬるまこる月乃影もしらすゆく乃藻の雪ハ下風

一 建保四年内裏ニて 寒山月

月のうへよやとぬらそしとも霜ともわからぬ峯乃木枯

寒国月 老松私家

山風乃吹払ふ床とるゝ夜ハうすくて見る袖の月影

行路霰

冬乃日の日脚いそくかさやとるゝ道すくるハ暮ニけれ

遠村雪

浮世まにすゑの行乃雪折みかとし山賤人の住

建仁元年十二月廿八日 八幡宮公 新藤枕

神垣や松につもれる雪の花かはらぬ冬にときはなりけり

月前雪

明ぬるか雪の光も同しくゆく月のかけまかふ風にみたれつゝ

永仁元年七月内裏歌合　冬夜月

天の河水こほるらし風さえてゆくへかたふく月そさし

松上雪

初雪のいふやなきのしらたへにいまは生田の杜の木の葉

河辺雪

梓弓ひらの山かせ吹おろす雪のしら波川のかはせに

正治二年二月左大臣家歌合　遠雪

うしろにはしらぬ夕暮の鐘をもとにかゝる雪

一　建仁元年三月五十首歌合　雪似白雲

冬の朝けしきは山はた白雲は花にかはりて空にとそみる

摂政殿詩歌合　雪中松樹低

花とみる雪は日数もかはりめて松の木すゑに春は待けり

風の後かつかつ花の雪のいく代を春と松の白雪

秀能　五十首歌　雪

あらし風初雪さそふ山の端のきはの松の葉の色

建保内裏歌合　十首中　冬

山家月光有らしの浦はれしは雲の雪の影

正治二年九月院御歌合　暁雪

ゆめかよふ枕とまれる松か根の林のあかつきにちるさ雪の山の人

建久五年夏左大将家歌合　深草雪

雪ふかき道の行のふしにたつねは我すむ陰の深草の里

文治五年十二月後京極摂政大納言の時雪十首

前言

禁庭雪

ゆきのみはしのさくら雪ふりて去年の春より十あまりの月

一　名所雪

仙人のさとりしあとかやこ袖に雪ゆるかたえのゆふ

山家雪　一

跡人もかよひし道はあとたえて我人の松に雪おもるらし

野亭雪

雪の内は色くらしくもふりつもり枯野の末に深き直し

旅夜雪

いかさまに山おろしの音たえて雪ふりつもる野のあさ日は残りまたん

古寺雪

うつもれ月もやとるらしゆきふりて我代の外のまたにつもる白雪

雪中忘人

いかにせんかつ人をまつ雪に空とちていや更にかくもいまそうん

雪中述懐
数ならでにあはれの袖にかゝるハ我世ふりゆく雪とおもへ也
雪中歳暮
年の内に雪とつもるハおのれと雪ふりにしかの海もなき歳暮
雪中旅行
打はらひ宿かりもしいね雪折れ木の下陰にかりて
建保五年四月庚申　冬夕
一 梅ちりし吉野の山雪ハふりまされちさくハ忘れぬ里ハ
一 世の思ひそふありしよりしも冬雪の絶えぬ長きもり
風の音ハ夜もハ袖の山の吉野ハ心とふふあはれ也雪の曙

霜枯れのまさの外の野へふけさ雪けさのとたえみころハ
宮内ハ行べき人の跡たえし庭の雪にこそ梅とも思
思へども忘るゝ時雪の夜に行かんしきらんたの石
みつわすれハ我袖ふるゝ来よ忘れ捨てぬる人の石ハ
御返し
西行のならでにし苦袖ハきえてもきゆる雪ののの
昔しのばいのしをでしのいにしへの枝の雪ならんの一村
我宿の雪ハいくたびとなれや山くに見ゆらぬ遠きなれ
思ひふるさるかりとハ我身その雪ふつもるもふりける
神のくハもの末葉もふりにしかは袖ならさる雪の跡

正治二年二月左大臣家詩合　冬述懐

いたつらに年のみつもりにしかひ冬ハなけきそふかき池水

山路落葉といふ事を

みち埋む落葉をうつむしくれにしくれ吹まさる山の木枯

松竹友

庭乃松ますきね竹もとく君の千代はいかはかり世の久しさ

載恩含乃沐　歳暮述懐

思ひやれ我か身につもる和歌の浦の三千年のむかしき君の家のいとなみ

一 おなし年　山家述懐 一

おもひいる太山のおくの柱のちきり思ふへくおもひける哉

おなし年　[illegible]若　松八千年

つきしせぬうき思ひ数をひくかそへては千代ふる年乃若葉

賀

建保二年九月十四日和歌会

月契千秋

君か代乃月と秋との契りをはとしくや木葉れ世々も[illegible]宿

建仁元年為相殿にて詠せられし和歌を

ひとり夜　池上松風

池水の世乃千とせを契りしも今宵の岸乃松風

建永元年八月十五夜和歌所にて御会有之夜

寄人竹にさかしく
秋の夜の月はさやけしこの秋をいくよかさねる世の千世まて
正治二年二月左大臣家歌合
松風の音さへ君の色にそ見えむ千年を契る友
建久六年右大将家歌合　祝　春日山
春日山峯乃朝日とまちえてのこゑしもきかむ萬代の声
建仁元年十二月更歌合
寄水祝
陸奥の千万乃ちらし君か世にいつもあひにし世とそ見るらむ
正治二年九月歌合十首　祝
君か世はまつ三照宮乃みつしほに秋の夜の月

左松　一
松か枝にそら乃鶴の松の風いく年ふるに小松か千代を栄
建仁三年十一月入道殿和歌所にて九十賀
めし之内
君か代に十年乃秋を見つるかな九かへりも万代やへん
松元二年住吉歌合
我君乃常盤の松は住吉の月のうつれる末遠きかな
仁和寺宮にて寄松祝
この里の思へる松葉の月の光てらす君か世の人まつ
建保三年五月歌合　松縄寺

すみ吉のいく世のあひゝとき志賀松か枝の名にかゝるを
一条の院にて初栽松といふ題をよみ侍しに
七十年の昔のしるしの枝にやよろつ世の緑は松や契らん
久松風　　顕家
松にふく風のしらへにはなへてそふ世のねのひの琴
建暦二年花の桜一さかりにつけられし
翌の日　　中納言雅経朝臣
花折くさ一えたさかる所にも千世をかさねの花の桜とそ見る
返し
君か代のよ代につゝよそふ花の桜を二えたもかさねの色
皇后宮大権亮右衛門督長兵衛のかされていまゝ知らさり
志ゆれ御影華に菊の下かさ添きられしとて翌一日
白菊の根にかへる人のかへりてもいつれの花に折るなれし
返し
夜な夜なの庭の白菊の色に心は見かへしものを
かねにかはれ御一年花に根ありてそあり
これをもしたゝ心をこそおきて
うつろはさいとゝつらぬるかなもんの名やらん
返し
はなさかりとこれはさくらの春かへなくてつきなさえや見ゆらん

如斯元服して後陪従上の加階したる時は雅純志
中将
袍の中まは思ふなれは嫦さの代には小男にあまる人
色し
袍せんはこくし男まへにはまるまて此君小あ〔は〕よ御代を経しき
同中将の子れありさ袍を〔に〕つらるまの年のつるみつに
紅を思ふ思ひに御りて忘よりひあるこさし海の色
か色し
赤の御ありを〔を〕望むにさらんまことのはかへさ〔はか〕ませまかせ〔こく〕
年ころ思ひそ袍は二位より〇〇〇せへさせ給

高遠は陪従をつとめよとゆえならは同中将
う袍しさは昔つみ志袍とりし袍といへかるやこと〔たる〕
いか色し
嫦さは昔の袍の色にくりかへ男小なれはこさ紅の〔色〕
お中将　宮内卿
う袍志さは昨のや忘れつし昔の色とや袍しさは給ん
か色し
みを字に花しくひける昔の人の袍の紫の袍を給ひて
とはし志たる志ける年のをかへさ給はと思ひける
同し集の顕に多くの上臈を袷て女て給ふかし

宮内卿

御子息おほくて此方にや侍りけんと云家の書の秋のせいさいハ

う色し

う請志て祢とらんへ乃会拾ひと名けれは御方にいつてこえ

人の言葉散文にて瀬にとされし石をてられくのら

京りて給の清花給后の御一地形勝地の中（池作）中年に

ありへんゑの出羊し在せて我云聖乃花の中の花

書日記や海りる大臣乃る寺して紀のよし云志のそて主さ

元の代にせらさ人の庭と川の花の名ことを数いふ代々の人今り

院御所六月庚申扇合ありして左方に三給ふ

へうき三条大臣よりなまりかへし清花給下まうせ

志のハつまてまうりし

おき海出るの代よおふきる九を我ハ中方ハ花集にもえをあらん

二条中納言清司に宇をけゐるつ述懐百首に

おほくしみく称らく左兵衛督にそりてある海に

柏木のやる葉の春に々太云の流行の志けさまに

か色し

右兵衛督

書乃為なりねとはの思ひ乃し御くにまえりさ尊のつしんれ

雑又中納言書日の行筆乃賞をさためりく正三

位志ての給ふ

左兵衛督

秋の夜のくもゐや春日山すゝきの葉末秋もしらん
かへし
うれしさの色と見てこゝろき四季の諸へめくり
天の岩戸をさしてこゝに位ゆるされし紹小
君か代に君をはしらそめ月と乃くもる春まつらん
かへし
人はいさわれもや君を千代はいのる春にあつ泡
右大臣清のみかねのうへに
八千代山の松にいのる雲のえくを見すき千とせ
かへし

年のうちに春の日新やさしいはふ人きかれぬ山のかすみとそみる
元久三年正月高陽院殿初子宴
遊花春久
あらたまの年のはしめの春の色と見て此道の花に紹小
日吉社五社成七十か君小こゝき
百年に三十年たゝね岩根代ときれ是くはかり
おなし八十賀
百とせ八十年の坂にちかつれと君のめくみは世にそ代る
恋
建仁二年六月殿のつりとのにひと

六首題とありて此題ハ小倉ニ詠侍しよし三首

初恋

まだことゝひもやらぬしもの初草は我とるやむすめ

忠之

夜嵐のちりのこる花のちるにも我とも思はでも人の名は流れ

久恋

我中はうき男の涙の三瀬かは人を恋わびぬ事ぞ嘆かし

同年九月十三夜の御月見之大酒三首　重之

忘れやはつる此の身の雲の晴を待とぞ見えし月の

友之

一

影もうらふつてみよといひてみよや今宵の月のさやけきを

秋恋

今宵は月やいかにあらんたゞ人の枕とすべしの人ぞつれなき

久之

床の君枕のうへり消えぬしをひとゝもぬ人の袖よ

暁之

西新は待夜しらずわかれてつ猶ぞみんけさ別れ

暮之

すゞめの人は見ずや人の名とたのむくれとこそいひし

某中之

忘られぬ木葉につけし様もかひはあらしと思ふ三位中将
山家恋
風ふけは峯のかけはしたえしらん人は跡もなし
有心恋
つ様夏きとよりと世の中の長夜半枯ぬるの中の里雲
旅泊恋
忘れしな浪路の月にまつへかたとも片海と我との海の苫人
羇路恋
泊りの湖や流れのあしに新三らひて宮殿やゆかり風そかなしき
海辺恋 一

別れ路とし海のあま士の浦まてていかんさまのなみの
河辺恋
みよし川波まにつけし枕くの袖のたくひも瀬ゝの淀木
暮雨恋
ゆく末をうきとあらはしに涙のこゝろのみなりの村雨の空
寄風恋
白妙の袖の別に露おちて身にしむ色の秋風ぞ吹 定家
建久年左大将家歌合恋 三滝江恋
うらみきみ哉んさつらんはまつ江の大江まつ月をへ河かね面の里
正治二年十二月左大臣家歌合 定家

よをまつやのゝこゑはまされとも月とかしこへつらわる
建仁元年三月尽歌合　遇不逢恋
ん〳〵といやねの月なり忘ぬ神のまにへ〳〵ん
宝治御百首　夜恋　元久元年七月
待人は山路の月によしのれは里のしつかさ北秋
建仁二年三月六首之中恋
答し夜の末の名残月はころもあれは秋の名とこそ
遇不逢恋　寛元二年十一月当日　和歌所
忘しこりはきゝ世の月とみてこそ宮城の野分哉
寛元四年九月實雄家歌合　暮月恋

やつれぬる袂は霜さこえり小河かはしらなみのそれ月影
三百六十首　恋亭
まつ山の下草かけてたのむ山の名をきかね袖と人也けや
忘しは忘なそれ忘もあはれ雨の月のかけしし一言
まつ梅ぬ秋しのさそらうつ秋と秋知ぬ秋は恋行
建保六年二月　庚申　久恋
忘る名の月のおもかけあり元年へけかけは逢世の人つれなは
建長元年七月　和歌所　秋忘恋　当座
しきや河ゝ忘しれかゝにた恋よ秋の言まきねたれけり
建暦三年三月　内裏歌合　二首

やそりせぬ今宵の梅乃山と根ハともしれ君乃宿のまつや
我乃こひしきりにの紫ハ各しれ思の久を海さそは
新とさふあやせよ山もへ思ひうちふかみのをみハ身ねとも

建暦三年九月十三夜内裏歌合　藤有之

ささなミやしかの中つやの志賀の柳やさしんの海ハ露て流しを

建保四年壬六月内裏歌合之

逢ことは世の人乃夜行と捨ておもはぬ久をみぞれそちらん
らんとまんの海の名きにやらやしほの名もこれて

九月十三夜内裏　某海之

人ふうき流ミりや夜乃とのけ宿ね言もと袂とのとそうく

建保四年ゆりて　寄恋之

かよハなる身とはてのかいしか迎へんしきせ恋の一夜ころりと

正治元年左大臣家冬十二首歌合

咸某之

あふ山乃年の言緒太ては久りのかくさぬとはし

行吉歌合　藤存之

尾くりせしかりほ乃秋の露くりきてみを袖の久に思ふて

寂なる雑身といふんと

かいつきぬ刊ふし世それ両新たわしふん

仁和寺二又花五首　寄恋之

花のともしのゝつねなかりけるなかにはかなきはなかりけりて世
建久元年内大臣家にて文字をすゑてよみ侍りける二十
首のうちにしのびしみ恋五首　かくれおもひ
津の国のなにはの宮のみ津の風のつとめとて人をこひしさ
いかにせんなる大神の白妙の御ほとり花の人そこひしき
おくまんあふ思の山の岩まより流るゝ涙のこえも人しらぬ
わしゆう秋浦の浦に浪さへ涙をかくさぬ人の袖やかくれなき
しるらくみすゝむすると人しれず秋もに田あふことをまつ
中納言長方卿五首歌よませ侍し中に
池恋

うきともなにとてかくいまはかへらんとこゝろにほともありけんと
建久六年左大臣家五十首　恋
思ひあまるいはでこそあれとかやさへいかにとかくれ
建保左大臣家六百番歌合　旅路の恋
露をとく井の下帯のゆかりしをいかなる人の契なりけん
山家夕恋
涙せく夜ははるかくらしはつらい我のゆくへをたえし
建久二年八月十五夜河原にて思ふことをよまれし
庭長月恋
旅の夜のなれにし物をいつまでかくるしかりけん二夜そこにしのぶ

寄苔衣恋　　　　政家

潮風にぬれまさりゆくにそことなくへぬるあはれなる

遠待恋

小塩山千世のみとりそ苔ならしさしてしれといふ人もなき

寄雲恋

いそのかみふるのやしろもいつかえつさか神のゆるされはいかりなんとて恋

帰無縁恋

君まつといふかさらの空小月にこゝろてふ小夜の根のよそやねとぞ

暮山恋　　権大納言家

うれしさの山のかひある苔衣うきや人は袖との夕暮

貞永元年七月大殿歌合恋十首

寄衣恋

秋草の露に衣はおきまよせても袖せぬ袖はいかゞぬるらむ

寄糸恋

いりえの花のかゝるれはつれなしといふ人のくりやせさゝ

寄弓恋

あつさ弓ひくやすゑのいまさらやよそにのみ見る人の袖かな

寄枕恋

忘るとよ三とせの後はあら枕さこしかへりの月はうつせて

寄玉恋

絡と見えしかゝしのいとゝ月をくり云まてくる秋のこゝろ

某節点

いまきん工いつもしまゝきなかしの列まて[?]まつり、ひまゝ

某源点

音しきのいと去て白鷺し西郡いあをくかんてかき[?]さ

某道点

かうの末能さる月くり秘乃其道遊りん中へんきこく[?]又さい

某平点

白妙乃神の御饌るくいかんうしいまや清さあらん

某洞点

んいけくにアカ者のと云郡の洞のりよにいととうらん

ともしめそんは

かゝりけくきこえゆんの忠志さいせりやゆくさりとさ[?]

某乃音て

くりおいの文まうそれにいしさりとの乃く[?]ゆかり

語らずき所日本よけ神とは代を御ゐおやおりて此

世かけてつき遊りかあいそ其十[?]きおりしの文を[?]ひとき

みるくみてうふさいかん在やうさ云ふて松の翠の白也

あくつねさる栗の葉ふとく音れ神や白ゐやとて照

王来の「てりおつ年」にいい瀬はせの下にいくさけていく世いはん

秋は月の比まちまちてありして
かすみはかくれもなし秋は月ことによし月のさかりすくれけ
つゝしとおもふ人の見比ゝ比のさかりまさるに
人のやさしい情えて口すさみ給へ後は日も又君らむ秋と
花にも梅をとかへて人の梅の花とみせて人なる
人のうしおもしろくて
いかにあはく程をはしらぬの家のみ所わかれてまた音のみあ
人
秋のやはし花の色梅の花もにほふ新への昔乃夜の月
かはらのみえて増かりけるそ世のあはれ人のいふよ

忘れくてあはれなる事にけんまさる輪乃をかしや雲に乱れ人
一ときは事夕さ女すんいさく思ありてつれ程うきに
内まで成むていやましくさし月の梅の花にみるとも
文にしくしけれ乃つ留けりて露かるにあられ色ひ
程の夕さとこそくゝてくさるもみはそのさかあり人
のありに文まり知ぬれいにまさゝんとくらしするとて
また程わかり坐り比一旦と乃ゆりそや化そそ尓るれ内
也し
為すかくりけるもとりすまて花にちりん夜の月にうき比
秋の音とかねてまにおもしきて世くいくてあるへんよ

いでぬくんはつんく
いふせんすそ三枚とうふそ男にそなたをとて三宝を
されてやそつれがすう朝日に冬のいものを白雪をふる
返し
三男毎に三ひいてくれし枝ありあさに三名はおし三刹と
とちらを所にてん神のことそそしひとあれくのまん
はの家に人と我小ぞうよしとゆて三位中将
三男てかよふ人あさよおくと物を心写にいかてかうらん
返し
おほ沢は三の浅来とぞ思ひりまくこぬ山はわかるはと

知かりなる人よ
あ雅花く新もり涙の文みかくなるれぬ三つ当社
からの名と思め給房にいからでよ中の琴りそ月草の花
文路よりの人さそりすありくうさえそしく
あまめかり三家れりん乃とのきかを思いますさ物かなれと恨
返し
みかり竹のかりそなんと家業に我をやうなんて住やさ
かさりなく思いしてくの三月せ河りなるよ
あらきれくは男子ちよ雨移そを我らの人とも間のうつよ
返し

いつのころか西郡の方なる人家に田舎ならのしるき
ありける院もうつりかはりて世のまぎれのまぎれ別を
六孫もとおりひてわらしし のさけれ
まかれいわしのまぎれなり そく
いかに見ゆもさるくみん数へ似くら須の門
うち見の河の瀬にかへるさいな
あさがほの祝とくさしてちるん
三の谷てふ事あつまりさしに秋のさいく夜なりきたる秋ん
志のえれも夜をいたふと契り 申す
うきふちへつるみきとす せん

せきとめぬいまりくる若き河へ流れえてな懸の根本
あまり川けくての流れに浮るれて
つきせぬえん懸との契れし本
思ひやる河の流へも思いはく試のくにくゆりたりと
思いかへる河の流へけり 中ならく
いまやわたるさかふりなりん
そのかみのちかひを忘れし
よるふるふ思ていまきの松わの流れぬ流れてるめぐり
返し
ふえしるをいひとかくれ流れぬ人の思ひをすこの松か

忘れかたくなりぬる中にも
けふはいふかひなくさめて人のおはすその名残あらん
かきやりしくろかみのすそたにいらやうに袖は涙にぬれ
おもひやりて見るからにけふなりつる泪はいとゝまさり
こまやかに語りいてぬるをかなしう思ふにも心に染の袖
　ことはりなりけりかしこくも人は
いかにそもそのかたにはなくてはいかなさし侍るを
あはれなる風のおとにつけてもおもひさためかねつゝ
思ひなけきたるなかたちのはらからのあはれみの御
人もなきつれつれをとひたまはん胸のとつる涙かな

されはこの御詫ともありさまの後ことにて世をあはれと
しのひたるさまのをかしきは御よにはいと涼しやかにかなしく
とのつゝみある程にかねていまはやとて人の宮のしての雲
うきよのなかにいてよとおもふにとくつゝむゆへかはしき
聖りとこそ思はれとおもふ思はる風のあはれにかなと人聞
つらくおもひて人やりならすなくの中ゆゑにかと人々にて
浦くまつたきもなかとしいりまつらすといふかたのみの
　人のわかる御とはのこなたへふかくしてもてなるとて
いそかしく忘ととかくるのことの心えみえしたて給ふ
とのつゝみ給ふとありしそなふて胸ふせかすくらしての泣

しきしにかきてあそはしける

いふもさらなり別とかきりとてこの世なからのこゝろかなしく
かきりある命はゆめ/\忘れらぬゆめの月日へてやは
みはつくしさかたにくしつかんかなし浦の浦の流
涙せくしすき床のうき枕うきてそよるのあはことなきにも
忘つさと思ふ志かたるなさあしいきしはとおもふくる秋とを
山のはにまされくもる月影のゑんかあやしく夜すの忘し
うきはかなし涙にくれみぬる君まつ忘ん人いつしか心忘
きはめる恋めしの程をとえてはかなくかくへさいのちつらん
いつる涙そ忘てあはれきよたくさまん世なるるのいかせかる

ゆかりなき世のうきさとおりふしなき程ぬれはきてそいかにあはれさ
にも身さた一度にかよへん程なくは袖んにまな程と思ふをは
とのつらんは涙やまらん袖はりあまるうたかふ程の度
面影の方にまた袖の面はんあれ月のそふ夜にしこゝろなる
おもしいかなる夜の衣のかへしまていえは君のまそなしは涙にて
身のつらんと思ひそてまなやるきことかなしてまあれ夜あり
まんとうきしを程をと長もいそれとおもひてはとくるもく
かくてはとうしの橋のこさまをしはつるてあまにあはすしやと
とはかね命はいまはあるはいくおもかし世をとあるに別まいらする

雅

旅

伊勢の勅使のぼりに鈴鹿の関こえしに山中の桜咲たりしを下りて

えそこねこれやさてあまんいふなんかりそてくさき花の新る

宇治御幸に枕旅

我いねは岩木の河原ちえたる月まいつゝる枕ちか中の露

建暦三年八月内裏哥合　山暁月

やまれ月夜ふかりし枕衣そむやは流の山ちかしくに

河船旁

あさ川ほつさふ流にこぎ出て黒ことしかわたる枕の旅人

建仁三年秋和哥所哥合　羇中暮

ころ海ふかやてのゝてのそとにゆかりの旅のとまへふ

山故枕

つ旅くとねよくさむり山風に里とも人のこころわとやしか

正治元年冬左大臣家十首哥合　羇中晩風

いほにふかと波は宿とり夜はすぐ花の三秋の風に

同二年二月同家哥合　秋旅

忘まじな旅もみつえ中くまつみえの山すみぢの枕風

建仁二年三月六首　旅

神な月守山の紅葉の色みれはおりやつゝこりかゝる谷風

建久元年秋和歌二十首当座　暮山雲

沈みてもこれぬ山ともみゆる哉中にも雲のはてしら白雲

建保五年大臣家歌合　羇中秋風

うち払ねよの旅衣やまとも枕風よこの里人やこえ侍らん

摂政殿詩歌合　羇中晩望

秋のよのしもさき衣に風てらて明ぬるとやも白や

かりいねやかくかしらすのかへるにちきさ方ねはかせ吹

建仁元年十二月八幡歌合　旅宿風

旅寝する夜半のさむさの嵐かな森の山風夢もみえねと

此乃四日侍し歳の暮に比叡の山にのぼりて中堂

小籠に侍るにまうでゝ和歌よみて雪の夜にひとりかゝ

のまことの奥山の月のかげさえてつもるゆきの

ふるく

おほ日よりけや雪よ海をこえ山の奥のとまりにいつ

ふるさとはこゝろあてにゆくの声といまやいくり思ひつる

比の題

こゝろにもあらぬ風のよの旅枕の夜にはくいかにこそ

おのかとさすらひはいきさこほ雲よりくる松のたにに

建久七年内大臣秋十首みなよませしとき　二十首歌

ゆかん志中み旅のみち

谷の戸ハ三とせとて紙蓋て、枕木の松の研風
月影かく山と海の岩かめのにかゝる袖にかゝる月影
折々お渡り舟の名に近江の月のまよふ風やかくこそ
頼むく子の立ね小忠へ山のいくえと人来るん
埜りきみこれとおもふ月の比かくさし宿をさしてあんとに

松尾ニ合　山家夕
有わかひとすしへき山の夕暮とおもふね旅をいそくらん

内裏ニ合　山夕風
嶺の雲と松に明たく追風につまきやありき浦ゝ人

旅暁月
折りし笹の葉の露の軒にすゝ侘てあかぬ月の
内さりはれ志らし　覇中
あさこえてかんへぬ山路よとよへし夜深くうつし吉て安客

旅泊
旅枕なれし都とこの月の海に望りし月の袖ぬれてそ
水の浦夜のかの人の旅衣なれたく濡まりて
比よとかんとてりく我かれそ清花和白浮へ
西新わりしはの煙くらそしていくつきさ夕暮なる
なんてハあかね暮のかへとやむて、旅の都も旅のあらし

おもひやる月もをくらの小倉山ふかき花しもとはぬ日のさひしさ

述懐

建久五年夜左大将家歌合述懐 浮田君

忘れしはまよふうき田の森のしるしも一節に沈みぬると

建久元年秋和歌一首 述懐三首

忘れ行代にはつかをいかにとのなくさめておもはれたまと

我そなく此世の神の社かけ月年はへぬるかけのまふして

おもひとく身のすかたの思草忘れとて沈むしのふはきてをは

兼元二年夕ね見舞給ほに八幡にて講をかうしゝや

忘れはしみをかくれ給し

せく袖はうくまかの乃けふもそ身乃すゑの松をゑらはしさ

秋風は涙をさそふ山のはに乙しかくやの里の月影

同廿二年九月禁中歌合 千代詠

寄海朝

和歌の浦やうきてこそ波のよるへのうかりける拾ふ玉きこゆらん

寄山暮

思ふ林は林中言の葉乃日にみゆる乃山は何えるれしき

おなしく比

あきかせの秋かせはさよふけて思ふさきと思ふ心のなみのまよふさ

賀茂社　新拾述懐

あふひ草まし君より君に頼むそ二代まてあはれはかけよ賀茂の神

嘉元二年五月住吉社歌合　芳山雅

いにしへの跡たえてかへし三代まて山路の代々に道をしのへ

松尾社歌合　新拾雅

神垣や我身のことにつましくて秋をまちあへぬくその浦せ

延慶三年閏九月四日薨　三位侍従

芳風雅

飛鳥川いまは尾花や世の中も見る男はいかゝ小秋そかすかなる

三光十五首

天地しあまねき御代といはゝへ乃あからさまにきこえし世の

つゝきくては海いくせ乃君かへん頼む世の音すらしられ（未）

嘉元比よりゆへり歌合を書てまゐらせしおほくは

たゆうこせ乃ゆかしき頼みて人しきこ道乃頼や乃ことは（え）

思ひぬ一向かりは君のこしても人乃こゝろや思ひきこえむ

ゆかしきことをきたまふ仁和寺にてまゐりをそ

宰相きこえ自のたに葉かきこえとて言よのさねとや言ひと

嘉久三年内ゝよりそれたま述懐歌

神もけていの月にたのむ道をしらせてねいかなる後の

後南光明院君かねて御後のさね太上流を絶し

又此日ふ梅かえ二條乃父よみて同宰の衣の一色ほか
ゆるさ被へきよし此宰父仰られハ也し
通とふりふん乃又まん梅ゝられハ此つきねハ云えそうし給さ
宰相之中七人学鉤之例なきよしと申て給位
と讃申しぬりし所ありかうき人のかたこゝを
おりいるあまりあふれんりて立当れくハ御やよろしかり
也し
去ら乃世のところをまかり過てまた西新ハ立てのあまた
うち乃あハ鈎ゆみ奉
東宮深旨乃法よ下為条議職多く納言よ果進有

へきよし申之よ正三位と申ほ法花ね位よつき給し
雲の中代ハ其の枝さに又御されきこえ乃本ハ花の御くろう
人乃よろひからくてゆるされ給さ
建之元年鈎位よ宰加階之ら朝よ左済大将経在心
是所ま本つくふ当乃被ろりうましてき一御しと度はえしく給
なる過し
からう本所ょ所乃よ代枝ハ度中宰相一梅之過さ
少位立て下条守参木日纂中給位重人そのとおし枝よ
立帰り枕之恵つさつ藤様うし人のうへ形よらあわ乃地
也し次の日

山城の人に申さはこそわかなをつけける神の名こそありと
小侍従のゆかりある人のむつましくなりけれは海のそこをつ
てやすらと申しけれは人のかいなふかくれけれ
うれしさやせの枝をかへし見とかゝせてたふへき人ていつまてと
返し　小侍従
まてしはくるれなかれとしらせしうらみにまた祈くさきにはまた
菖蒲のよし上人へ紫羅の衣とゝ申て刻まへきこしと
さといひしもかり詣てしくなさいしとなら
小中将へ梅の花へ紙しけるは書付てまいらせ
山のなかの里にてそしかけやまて元に植たりと流れけり　そ

返し
しるしあらはと思ふことの御祝たるに深くこそおもひなれ
又
おもふ松の木すゑにかれ露さくへきと思ふほとに
返し
祈はやらはゆめのをとゝめて下紫の衣のほしいはゝ
三十返りかねかりて此手をかりゆかりて見
よしをしかへしてさ
そなたはよはし大僧正の長うときて
まちかねて法をかへさ給はやみて書付侍

はてしなき　まつ乃み山の月乃かげ　鶴の羽しろ
へしまり　へおるると　かくふきしハ　二あとせとし
ときこそ、　はな乃かげの　百ちせに　へおるこも
かすしき枝　かれみちの　なれあハ　きこえけは
なりねきえ　枝まんをも　御してそ　松山川よ
あんミゆく　いかゞそ梅　はなのしハ　あれしくと
かぎやされ　いと西ともを　三られさんで　荻しもみち
ちりゆ宮え　楢かさ　太山夏乃　たにましいて
ときこゆる　いろうんと　そうしのふ　しいつきさい
志賀の浦　波あれらく　日吉のや　神乃めぐみと

あめのもとし　人乃猪いと　みなせ川よ　あはれなるさく
なりねへて　昔のいてのもこしはへ　昔のおよし
しられゆく　こゝろかへさんくらあめ　あまつ乃花の
世の中しや　昔の宮ハ　しみしくて　秋のこするさ
おりふしり　冬の霜と　それならふ　かくてやいまい
うらそうん　こおりふるよ　乃れそう　あかしきみの
いれ木かい　こてぬると　いのちで　夕ぐれうちと
おりえいて　志賀都よ　やましいく　のちあけの
花のなハ　志のそうると　はくえ山　志賀さらみけさ
猪とる　志つはしのしの　そますをとし　すくふんと

梅くして　ほとゝきすを　はなれなき　千代の栄と
ほくくと　我老か代と　ありつきまた　君の松
のこりて　み世のことと　こふりと　のりくらその
花のいろ　匂ふこそ　まれいてぞ　人とつきさえ
うつりて　三しんと　すむしつさ　つのふいまよ
ほそか川　ゆかりはや　我身らし　松のもとの
しきこり　君の麻衣　花のいそ　くちわこま
しらべかき

也歌

ほうさはし　思ふ人と　我はかり　さえしてて　えゆく　山月のかる

也し

みさゝの　去比まは小　かきりなさ　あまりいつさと
ちらひとこし　ほかなきに　伊まれこて　我らの松の
いのりつゝ　むかしの人の　たのみてなる　君か代松村
たえへと　いくそくと　つきんかみ　八重桜にて
みかめの　ふしのなと　こよりんて　ほとゝの花し
およろへよ　ねんのみ化　よかとさし　すゑの流
ほさちかき　萱か下葉よ　こぼれつゝ　かのへの
ちはすなて　うき世にさ　くれ竹み　そくちとこる
うくしきそ　ちるとい雪に　ゆうしつて　続ぬへき

谷かけ橋 こえつゝ若なき 三のしける 志のそひもりょ
かへされぬ 其のうち染いつ猶むとも 老いみさの
やまたかき 雲ゐの雨ふり岡くまて 照らせとせよ
雨をやすし 星れやよりと やりもてく 元ごりあまし
もしのやま 在あいま松の あさてめて 前つきおもれは
山をふもと 清の志わ引 花ことをみく にこれかの世れ
小ころかし 清のあまあ いさすやこして 秋のあまれ
月のかけは ありは山の葉と ゆきさめくり 花やし代と
あかきてと 山あくらえぬ ゆくすゑと 王への河あき
そまちかつり 秋のやけとくりくへき 日暮のれの字よ

行きかうて 元といのこん よろづ代よ ふ世と言く
まんなおと 流えさわちを 歸乃るまな 必するよえ并い
其の花の油や いまいも葉とい かきつめて なめらと流れよ
みつき花く 試みちまれ あしせるといふことの名の毎の
父くれり 松乃んみて 忠ゆるやと
かゐし
元といのちいふるととつんあして いはみ山河乃ふ
延保五年五月十日 沙定して三首 せう 吉山朔
と柳こ乃山の ひある千宝山なえとあ 左の始まろく
せう 海暮

志賀浦のあまのすて舟我のせて心をとめてたよりともなれ

寛文二年八月新院より出されし

禁中暁月

暮ゆけはのこる夜もなしめくりやま山の端になく有明の月

御室にて　上湯人と

秋の月しのゝめの空にかゝる雲はれてなをしるへともなれ

寛文二年十二月十三日内裏にて讃岐せられさせたまひしとの仰されて

志賀の浦の志あるに思はれてやかて思ひなれしよ

こゝのへの宿の内に織る月もとかくしてまつへきかな

先人の偏にこゝろしらせてたりなむかしかきつけて

からてまたけり志二首

暮山月

さやかなる光をさへに山は霧こめて残る方のゆふまくれの月

聖和御

白妙の人の世々の御わかれはいはゝらくさの碑にも

同年九月十三夜茶大僧正所にて

なみゆくかくろこゝろの世を月と見んとそ詠めあかす

ありてうき命ありは月の月とこゝろねとそ思ふ

あはれなるせんむかしをつきこそ世はあへてかへさむ月よりかは

秋をへてかへるうき月よりわれなりそてうき身の世をそれて

星ともみえかへりて志もしん月とやとは思ひまらん
海はそ思ひえてかみ神の世も有志らぬにやる月る
もりすみの月を花とにみさやけり此比ちりは人やまし
祇園とゝへし本の月を月さしに行そ次世をも時
おほ猿は今まや小ゝもすへく、いの三の梅乃月ころへさ
し三年まて方小はま思わの思ひは忘られて月を見つ
かは 今日
みの月乃月はこゝぬと子れ世よみ山とこそいは思ひやつま
うきよのの比月よなしてかさみ月はかつて忘と思ひ知
明ら梅山の風をまて志らし志らし折る月は雲かくる

くもゐんの世乃ゆくまゝ三はすむ比の暮に月をまち之
月新乃人をやとわせ世をうき志りよいかなゐ乃窓
いさ海よいさとよ月はて年をて見えてつくさんへの名
祇園そしに月すらは己の月のさんへいふう猿の海
清水はいくん新人かさ月なうに志てへん池の月の影見と
世間をきにいまへく今月よ折よくゝまはやまき
えてこそみるまゝ世をもでてまゝんはいゝ海のり秋の前

五十三

二月乃比海の思ひよ成行まかひまそ大輔

つれなきを世にうきやといひくて言にいますきとしやまん
いかにも色し
かなしさはへこすもといはまし世にかへてなきさの世と
同三月晦日大相國家にて
春や暮ぬるかなと思ふの身にしたかふなごりの有つる
花ぞ色し
何將なる中の御言ぞ露消て山への名は根にかへさ
おなし年五月になりて三位季經
みるさとも忘れそとも思ふやまと月日をへてしおもふつもれは
色し
月日へて志のまかはとも思ひけきことことふ人の情を
秋ぬるをせし日次葉の時にありて御の給ひ
いかにの露に涙ぞそゝまちとうきの人忘るゝ夜の秋
色し
秋ふかき風の涼しさはかへすかの涙の袖を忘れのまゝに
三位中将なりけるに秋母の思ひて侍る居
忘るゝ九月晦日にあまりて見てまたる
初霜にも知らぬ袂をみいまきて侍る人いかにとて秋の色は
三十年あまり二十とせへぬる秋の霜白妙に袖の下もまて
あり明さらに世の中の風よくたてし袖まてもそさ秋の色は

まゝ人のつきぬまゝに秋の声は猶まさりてはかなき世
露まてとはましと云人は殊にしみことしるさへ秋の音はあはれ
の声てこれは昔に似たる心哉めてたき秋とおもしろし
こそ身にしみつゝ秋の夜の風に猶たへしらて花のあさちふ
秋のうちは思の事は風さへしく昔のうへけるもの秋やいなさん
まさに物をもうしなきさへ夜の枕にも秋のあはれを秋にあはせて
と云露の夜かりは心のなかく云と詠まんなるはまのう
物也
音の秋をかへて身にもしみしなりけりやさしく庭の物
下物の枕そ云て思ふなる事は十五年はさかりの床のたえは

一秋はつる秋の山風は冬の山下風にたちかはる暁の空
人の世の霜は身をとは深く別る秋のいにしへを秋
かく夜深く暮の露ちらしてい秋の音秋なる夜
思ふ事のつれの時かなしくて此比おもひゆくすゑの空
一秋のはしめにてそいとあはれ秋を是秋にとて庭とめて
云はさに思ふらてやたのもし秋にふく嵐そ秋の津
いそくのをかしはやらぬ秋の夜さはまこと物あはれ云にて
秋にはなきもあつかりは云もの心あのもうりを月にあはせ
一とくはれしとに深りかんして心の思ふと詠むといふ代の秋
たゝしは女院の大輔に

いづれも秋の月の折くはかんじ給ふ人のうらみをおもひ
出し
はかなしやさてもいつまで思ふらんいのちと云ふもありけり
おなじ年の雪の朝に書けり
身の上の雪とおもひてきえまんのみおもひて云ふに袖は
人の世は思ふに移り行て我日にしばしも雪は消ゆるの
いふに云ふおもしろからん昔の下といくえらん雪とうしたもん
まことにおなじ花の袖のしほそでとしもへる雪の下
われのこ移りゆく雪の身は世のうつろふ花の色ぞめに
流り行

花にいえてうき世をすてゝかれがえしの雪とよくにしも
雲つもりゆりかくえおもひなりけりおもひわれよき下に
おなじ世に移りすゝみ六ほ雲つもし昔の下にゆかしさ
去年は三ね花の袖の移ろひく花に似たる我の雪に
ゆりて此世のさかと心こ思ひ候のおく乃雪とこねに
建久元年二月十六日西行上人うせ給ふ
これにゆかりありし中にて三位中将許へ
望月の比はたがはでかれきさらぎのゆくえなるか
上人先年詠
ねがはくは花のしたにて春しなんそのきさらぎの望月のころ

返し

業乃名ときてくりそつくさむか清みてハいましぬれけり

高指殿夜俄哀の比此もし此ものあくる日言葉して

うつしけれハしかし返事も次よ

昨日まて淋しさあまた花一夜の哀れ春の世

返し

かなしさ乃此の夜にくふ指ハあるかる花に月の風

そのちり散へくあ指も

此る花忘とハ思ひしもあるかの雲は此く（月）くるる

夏乃夜のおもふ乃月夜ハおもふあはれ夜にハ今宵あはれ

あく波木の月にハか指恋雲乃夜ふねの残ハ見えしかなし

みして忘ぬよそとも思ふ夏の夜ハいつか思のさかんとなん

思ひやめ昔乃下にそのまくれ露乃若の春風まくれ

あふさこし此乃ありにこそしらしあくまの君風

かりそめ乃ねまさせこそ人の池のにふりて新とあらし

いつまてか旅に春の夏の旅き一こえおし旅と忘つてん

ときこなしのちハ旅にちさやと忘ねんおりしいつもしく

情のあはれん指ハ涙乃瀬にをふたくさ人の旅と忘て

かへし

忘らる乃花のすつることかすまるへのかし煙と胸に燃て

せうしけへぬ浪はなくされ月影もうつらさりしを
今迄すみける浪やりいまく書きまゐらせ風かなし御神の御
事までありしはいまはさらしおくといふ別れてはいまく残て
うつれなくなしのいとのとまりのそこなむ持ちる花の下
露のうき命しれ昔の思ひされいかにすべしかくさる
山の名せさへ心にかるゝ恋しき影ともなりにし
まさの夢かさりみきてこし久しき春の森の梓にかく
世の海はしよしんいとゝきこゆるあはれの命小方そえかゝる
いかにてある我かはしらんれは思ひうきとききて涙は自ら
おもしき江人のさらな母すゝ

道かくり磯のそよことの葉を外国そえてゆく書の上ん
みゝ思ひうきはおそれぬ家といつけれは我にかはゆめとこほし
此おもふうみかへりつゝ万葉まれをせの下くさりは海そふん
よねん人は志ておの涙かる世よる旅てこしかる袖のつゆ
西影はまきかさりうふたゝされといふく人の言のはき
世の中はうきにあふさ秋はそれなほあはれ別の言もさみよ
行きまでに思へきとはさて行きさしへ思ひのかのあさこと
都路の御せく後世はなりそて夜よ深く久しさかはし
たゝかいうしの夜の江上人は
我うしく秋の名なしまゝかう移りゆへほくさとのゆくえ

ちくの世にしのたえんといふ人こそとゝめかたき折ふしにふれ
物言ひしらぬ月日へたてゝ花のやとのさしたのまを
思ひやる心さへ浮世の花の名の衣掛のかせの大空を
行かふにきく花のにほひ翁の声ねのうき世風にめくりあふとし
夜の鶴の心のいぶせき御身の衰へ行人に訴へかくる折を
思ひしらしむとも影にみえて老の夜半に似ぬ百年を送れ
うたゝしてとし古き袖の墨染ていとゞ庭の梢の露けき
月と花とみなきてこの花の散る葉の中の浮世ぞかり
おもひ河あかぬ浮き世の中のいさよひの洞にもしるか
文乃年十二月七日於浮世庵筆染之羽黒山の日大僧正

十首詠哥乃序

うきよの時はいつともなく思ひのまゝに得まさてかくし去年頃
より思ひいれ深く袖にまさりて心をとめぬ様にしみ
と花ていやましに月をみてかりしらぬほどにくれは
また心あはれなるのいはゆるを心もとめていけるに
老ての命のかぎりをしりてつきしふ年の情なきより
呉竹の月日のうつろひゆくゆふての宿のそいよ
それのあれぬる宿をおもひて世にはあらさんのえだは
うつりかはる花の盛りも見てかゝるをしらぬ人は
浮世の波といのち葉の信もしらんとして

いかにせん秋の夜すがらもろともにちぎりしまゝのはてもなく
建保元年七月和歌所　御歌
述懐
月日へて秋の末風さそふ風は三月の夜ぞいとゞかはりけり
雨中亭帝
まつ人はかきたへてけり来の露ならんとおもふ秋の夕暮
六条三位　成衡卿　人はしらじおもかげそへてくらしつゝ
うらしたふみちのなき別れちる秋の涙とともにせきかね
晴やらぬ夜さへ心のいろに出ぬ人のこゝろかな　房の淡さよ
返し

世を秋の空にそはふまきのこの床の秋かぜ吹比
ことのはのこゝちよみこしをし哀なる秋の別はいかにかなしき
承元四年二月七日　右大将殿へ
まれにも思ひし三月はうきおもひなくつまぢからくもあはれ
返し
夜半にふるきの月日を経てはむすびかねし涙の露は
入道前関白　雁がねの詞へ
いきてこの世のこともたゞいかにして行方をうしと思はむ
返し
かへりては猶ぞ見えずして人のうき世に住吉の松

永享元年六月後小松院御忌日菩提門院に参りて
思ふ事ありてなげく人侍りしその中に
むかしのつきに別れし報をひける昔の人を思ひてかきて
おもひつゝけていふかひなきとゞまりし身はいかにの長夜の
ふかき小萩の葉の露とぞおもふて涙さへの袖ぞみだれぬ
いぬるかたもしらぬ人をとへかしつくらかはれやみだれかくてさへもとめ

けふの月

おもひくの思ひなにはにつけて袂よ涙もいかさ秋にはいよいよ一つの夜
思ふやとやかに年くれてなく根なりけり
たのみきし神にまかせてしいよいよ一つの袖さへ涙のとこ

あへきむ人ぞその袖よのあはれしとは思ひ侍りしと
長庵の楼の床は秋の比母のおもひなる人よ
かくれわし秋の夕にはいかなる人けむえてわかれの糸すり
いはほり秋のほとても心の中人に一つすりその袖ぞ別れと
露けき袖に分けりとしのへしや秋をとふ人せん別るらん
形見とて残るあは秋の日はかなひまするを聞の記
かき一人をも立ちかへやきる木の葉に風立ち
露のそて山の錦のは衣へ返す一匹やよはりなん
おもひ下の枕の露にこたへて都の方の風のおく
ゆくとふらく志へ万のそれ往来りし十方の色は忘やはる

みえこの方がみに神かとさえつくれ久倍つさ社の為に
兵マの什あるにつぞてこつてよ一つきらるをおりしやうとは
女院かく詔させおりし御子く典侍世とぞ申さふし
一つ流かりして　前之日て
是れ乃久よう゛き世よかふうと深の神や派よ将うらん
色し

神祇

後京極摂政の伊勢勅使に付前之ゐまいりて
墨深と云の哀よまちか。つ三み三この久いある将うらんき
登りありくしう之河の井よつちこ代すそてしけて登らん

ひとし八幡の言金をてんのきせ仰し

秋及述懐

毎の心へ三言の御書といふさ一紙すまてふ年の様と

住吉并信羅林よ求子の言よをてへ之ちまる之へさし
祠官中に之かはぞてまつりし
住吉の松が孫あの御亡を流よいのり代はよ徐代をかうし
云か代いよ仰之乃春れとことふ小松と松とやよ前之公
松元二年乃松か稲月親三杉の辛稀をつさや

中志中小住吉
つ浪かうく轄すみのんよ毛白芸の引をてら乃松

かゝる浜の松の下流れ来る藻くずの如くの身なりけり

廣田

あはれとも広田の濱にいのりつゝいまはひとつの身を思ふ

海士の子もなき里のしるべいくとせに誰もまくらの影なる 寄るかゝり

ことわりとおもひしことを此世にて

ちかひふかき神の心に頼まれぬ後の世までも思ひこそ

こゝろとかけしはかなき日の

日ごろ心にかけて思ひ侍ることの中に

身の果てなるを思ひてあはれにいひやりたるもしける

うきを世と三十年にすぎぬ身の末をいかにしてか風にまかせむ

いかなる花や咲きとほりたる神に所を得たる松と見ゆるに

とてなき事に思ひ慰みに神の中に人の中に

和哥元年九月日吉会とてゆゑありきとて

もて六角の中

新成松風

落ちてしまゝの川のをちこちの松の風をすゝし

湖上眺望

志賀の海のあまたの中に見えわたる

御無碍諸の供にまゐりて

草宮

寄祝

ちるやすくぬれしえのなれの葉をかうてもよ代のためしまゐ
たか

河千鳥

さよふかく八十世と猶やなくらんきよき河原に宮わたりし

山家月

太山木の戸ちらにしあるしぬは山風はすてさらぬ月

新宮

海辺残月

はれ海なかへ山よつふうゆきぬの戸れゆくちをすむ月　新

庭上冬菊

霜もなくおもるみ海の濱をたえてたえてのかれ秋のこす菊

暁竹風

ゆめかよう竹の葉風にさめてゑてこそのうしの千代をやむ

雅智

深山風

風乃音はみよしの山のつれなはいそ大山をとひそ青くらんせむ
せと

瀬月

やくるちんをあさ瀬のいしにゆくつれの人こえを初る月　新

寺落葉

あたりゆく紅葉の冬のはれてゆくまちるを千とるらん　本杣

年えてそよ深くせされ給しよ

遠近落葉

吹しほるみそらにちるか唐錦一葉乃こさぬ峯のこからし

音羽河浪

ちる人のいはねにこほるゝ夕かせもをとなき河流のこゑ

通の府の守

山路月

秋乃君かたちをかねてや太山路にまよはるゝ夕月かけ

暁初雪

冬しけき年の雲といはるゝもことしの暮の初雪

深山紅葉

太山路ハ紅葉を散さぬあらしや風のふきのこしゆきつもる

海辺冬月

ありあけの浦の真砂にてる月の枝にへたつる冬はの月

河辺落葉

深き秋を言ねに流れいるさゝ河の流れ行山路なる秋

旅宿冬月

君ゆへのたひねのをなにとはつる冬の月影

羈中雪

冬乃日とはかりのへたてにふる雪にこほる流れ寺まの松風

夕氷

外道やよろつの宝は中にも此宝の花ぞ此咲の花

釋教

法花経寺へ人々来白設舎利講ニ詩哥結縁有
會ニよて十如是の心を

相

深き山まよふ雲間にあらはれて空よりやのかたちいつよろつ哉

性

にこりやと月のうちにあらそひは海ともならぬ心の月

躰

かりそめに鶴の林の名をとゝめ三煙の後ぞまことなる

力

みな佛となる身に限りなきたのもしの御法の縁

作

まことの田に心をうへて山の心たえずふかき實を久しかるらん

同

法まさる昔をたねのまことかや植ゆる心の花とこそ見え

縁

年をへてくる白ゝの姫小松いくよもかはる代の陰の縁

果

秋の色とまらぬくらへ梅の朝とく霰ありともまた

報

かくばかりと思ひすつるも月の前にさえかへりぬる心の隈に

本末究竟等

浅茅生や露の逢ふ末葉までたのむころのかぎりなりけり

人のまませ給ひし化城喩品等

かりの宿に我身をかへる法のみちにはなしりやたのみぞ数ある

諸悪含　五百弟子品

忘れてもこの身の塵のかく袖の末に人は底らく

おもう令　人記品

わが身に思ひしる実業の海のその身はしるまでに

安楽行世　一品経　法師品

あはれとも思はぬ人にきくときは法師の花の春風にふけ

諸悪云　提婆品

海原の中の龍に藻に宿りて雨の月に照るを見し月影

諸悪云　勧持品

露の身をいかにすべき頃を月影としいかなる春を知る

涌出品

いにしへの初の花の咲き匂ふ山の桜と思ふ

分別功徳品

ふかき山のおすゞの風も疑はじ神明の人しるしを示す

嶋景木

三歳なりしに親にをくれしのすてまてもわすれ侍ると悔く涙ん

三又十三年の忌日に遠き母御もとへハ云しもく

きこしめて写経供養志侍しに

森巳木

この石をこすりへと母のし給ひハ三つよし眉をよせハ候よ

清御献夷勧仰法花経普賢木

この風よりむく花の色しきて蛇の蔭のかすとて

母の一周忌に法花経六部かたにかきてまいり

く供養せ三給の表紙の絵よりせ志ニ

一巻

あハ稀世表の二方とかけえ我かれつさ二月は雲

二巻

おしますよ明のかをとし花の陰これは恩の下に向里

三巻

新たなる草よ海とかつかり狩やとしのえの会ハ

四巻

身をしたるの井の志かも志き給えくの風の涼さ

五巻

めぐれ花さかりの経かの稀ハ浦にうるに天あり乱世こ

六番

思ひきや世にかゝらぬ珠の月入山の端にひかりかくれて

七番

しられけり木の下の葉ごとの夜をもとにくもる月の年

八番

歴劫の輪転の海に舟ひきて生死の流れはながれゆく

無量義経

なのりまへんさはまふさゝのきの世を思ふいさ神にやきぬ

普賢経

ねがはくは思ふいはにも迷ひ替ゆく心のあさの露

心経

むすぶとみよの外の世界はいのやみは晴ぬるけふ

無量義経の心と人まかせしに

わするなよ三世は縁の頃は方々の君に有りとして

住心厳しき信じてきく人の心をも解脱房

のどかにて　法花経大意

月ほか花のなおきよき翔羽や心よりきく根のさまをも結

海路懐旧

不思議かんはゆくさきの宝を舟の海にまかせいふ

舎利讃歎の心

消せとも鶴乃林の煙にそたゝりけり乃かれなくみえ

金光明最勝王経法正論品云国内后人國家利益

四方乃海庭の月よて照をてくりかへし代の新しきを経

ゆき人の名と名こそ専教借まとて人の影

稜姫皇后

くるしきやみちのしるへとこそ思ふ世の中の有る(?)よ

二条后

君かため鳴る乃林に雲はれてこそむかしの二為

高津内親王

木のめ乃ほか根のしきなきしら世とそやし

安文女御

ちりぬともいかに花乃林とそかくしふかう雨の音風

慶滝御息所

うつりゆく末乃ことのみそ頼みなる桜子乃花

在原中納言

わが後を待つこと法の花のみ常世なる空の浦風

小野篁

ちよ限りなく世の中とれなき海とそ見よ

衣通

世の中間よりやむかし弥勒よりまさなこそなかりけれ

大津坂上郎女

んうき里とありわすれす輪廻の家いまやはなれん

中務

このよにはよくりの新たりさやかなる照をも有明の月

文治元比叡山にて十首よみ侍りけるに

[illegible]

月前念仏

西と思ふ浜よりみつしくはありあけを応の秋の月

家居忘除

[illegible]

暁天懐旧

ありし代のあ方ハ有明のつきせぬ昔おもひてあはれとハ

藤原親方

消ぬもん便りにてとも思ひ出てあはれとハ風もありおとろ人の声

旅夜浪声

おもひ寝のまくらのよるの浪にしもゆめハかへる都ハ遠き

船中述懐

[illegible]

厭離穢土

かくれなきうきよのつらきのはのいつよりのこの世のまたさとるかな

欣求浄土

おもふさまちかふかたをさためて惜からぬ身の果と

掬亀井水言志

わか身をもくみハなかれの亀井のみつにうつすかな

作非的精太郎筆

嘆さへんの慶色おもふとき清き流れの清のうき風

遁世のこゝろを　家長朝臣

墨染の袖のうき秋てかなしきハそむくにさへそむく世間

いとはし

いかに世をそむくの道そ捨しかれいのちをのこせとの命ハ

おなし付柳家入公

忘るゝいかに西にこのなせん月の花とうへにさとしや思ふ

色しし

闇西こそ浮世の家のさよふけて思ふハ捨る袖の月

詠百首和哥

春二十首

寒路早春

なのそら寒の霞川きえても西のそら霞にけさはさしそひて

湖上初春

あさみとりかすみこそこの八重霞えやはみえし志賀の浦風

霞隔遠樹

三輪の山まつの木すゑも霞にて泊瀬のいふあひさんニ本の杉

霧中帰雁

雁かへるかりそめならぬ春かすみたつあした雲の上を

隣家竹鶯

山里の隣ちかくになれぬれは竹の風にまさる鶯のこゑ

田家若菜

沢田の氷のうへあせつ(?)ゝ(?)みなれぬれはつむ若菜かな

竹外残雪

春日野は竹の雪に消えやらぬかたへを峰の秋の梢かな

山路梅花

冬にたえてはこえし梅の花さかりを色つゆのみちの山

梅薫夜風

あやしくも花よりしらさ梅のかほりさそふ夜の風やなかん

水辺古柳

さし月にゆたかに柳の糸みたれ河辺の世の春

雨中待花

まちわひて木のもと雨のふるほと花のひらくるまたの春の色

惜花留人

いさゝかうき世を遠く花のちるをいふ世に住へのはなん

遠山花

天雲によそのやまかくれなはゆくへの中月の山のはなん

庭夕花

ゆふくれは猶花の桜をふりそゝきて待をとふ人もなし

暁庭落花

あさくらとのきよくは風に昔のくもりも散まする

河上春月

ゆくはるのかたにやまきのの川霧も関にくもる月影

深夜幽居

春の夜の八重の雲かねまくらに花の色なりのこゝろなん

落花随風

松風のこゝろにまかせて花も梢のまゝにちるを

隔道款冬

松枝にかゝる道の山吹といふそやまふ数冬花

雨中暮春

なにはかり雨のくれの春のなこりを別れまよ

夏十首

卯花隠路

うの花の枝も白かれ露をとりもとゝれ

みちも昔つくり

初郭公

昨日まてきかさりけるもこゝろからふかきこそれ初の音

山家郭公

この里は待にまさりぬ山ほとゝきすたつねすむなる

池菖蒲

いくとせかひくあやめ池にしけるにたの五月をまたれくる

寄君敬老人

このはなく煙にたえぬ都はね行すゑ山の奥の敬老人

寄橋祝夏

神のよはたえすさらなに二たひくつ橋まてもかはらし

杜五月雨

住人のうきねたえしや五月雨せんかたなくにくもしるゆふの森

雨中夏草

あさしけるとみやの下葉のめかたちにみえれわかる言を待人

澗底螢火

日の影もとゝかぬそこのくらき谷に音は流るれ螢のみかり

行路晩立

中立の神はたちまちかりし夜ちかくなりゆくをともなれや

秋二十首

初秋朝風

秋来ぬといふよりさきに蓮葉に結ぶ露の風すゞしかりけりよ

閏月七夕

天の河ふ月は後のかさゝぎを迷ひともなく渡しそめけん

秋草夕露

秋くさの花もわく野への夕露をとらしやことにて宿かりけん

河邊暁萩

河ゆく萩のすゑ葉の風わたる月の入江にとまる舟人

山家初雁

旅人の雲の通ひ路すゞしくて山の端そむかりくる雁

海上待月

あくがれし秋の千草の花をかこちていつも遠ざかる山の月

松間秋月

神なびやきくみ山の松風にねさめの月をすむくもらさ

深山秋月

我すてゝいくよか庵をとはれしに太山の月もやどりけり

草露暁月

しきしのぶ露をきそふる草の原明行く月をこそみれ

関路惜月

あふ坂はかへりみしける月の影やおしき

鹿声夜友

山さとの竹のはしらの秋風はよるくの庭せんざいれ草也

田家擣衣

露霜のおくてもる山田の秋風ふけゆくをち方に衣うつ

古渡待舟

此舟にとはぬ侘ぬまゝこゝの河は我身のありやなしやと

秋風幽聲

吹風はいまの下露に色ありてこそとひくれすまぬ夜の秋

籬下虫声

さそはれ萩のまがきの下露に夜もすがらなく松虫の声

紅葉写水

山河の竹田くれなひの紅葉におちて夏の葉さへ色づきけり

山中紅葉

山ふかき竹田のおくの紅葉はいく入染てこれ見し

霧隔鹿聲

秋風のうちふく野辺の白露に志らで行棲の記

河邊菊花

大井河いく代の流れ菊花の色をうつしてもる岸の白菊

惜暮秋

まくらの雨やうつろふ木のはさへ名残をしきは秋の別れと

冬十首

初冬時雨

しくれつゝ人まつ夕の雲はれて月とは人にしられまし

尾上寒霰

まきの屋に霰の音はたえ〳〵に風のゆふへにしくるゝ

霜埋落葉

初霜にあとの紅葉を思ひまとのこる下葉も昔の人を

古寺初雪

しつかなる山寺の軒端をは霜まてつもる初雪

庭雪厭人

我門はしるへも人にしられぬを跡ふみ分る人もなき

海辺松雪

住吉の松やいくとせの雪にあさみとり波にうつれる人

冬の寒草

葦の葉に下わけそめし入江の入江の月の郷はさむき

湖上千鳥

にほの海や月待浦のさ夜千鳥浪とさして

寒夜水鳥

ときくとも風のふく夜は鴨の上毛の霜そさむけき

歳暮間月

いまいくかさしもあら浪の嵐は音の枕下に待らん

恋二十首

初尋縁恋

思あまりその里人にとひつゝもゆかりの松ハ見んかやと

寄夕忍恋

秋乃霜まとろ萩の花なりかくもとよ露のつくねまそかハ

恩報昭恋

それのミわすれていかん紫のゆかりのふかさ色へなる（本如此）

祈不逢恋

祈りつる逢瀬もきえて涙の桜川かゝるうき身ハ桂思ふかな

稀有逢恋

喜田山木の葉の露かり枕かハすもあさこかならずや

逢別暁恋

ことゝはむ鶏の山まてゆきてさて暁をつくるねをやえかな

寄書恋

あさ夜ハ紫まくら袖にかわす物ての露をしつくりてゐんてま

遇不逢恋

よるへ何中くに家もなくてはてのちかはりてみのみはてね

契経年恋

秋の山すきてまて木のはへいくたひしるしをみせてその文の記しん

疑夫待恋

そむきても世のうきくものいはまくらあまたぬれゆく草のかけかな
法印清之
しらしらとあけゆくかたの思ひのみ若かたにこそなれ
性尉残之
くまなくもいふかひありそ橘のさえてしるらん花の袂と
定中弘之
そらの人の升市の下草しきしもしらぬきんてしれまの
浣門頭之
思ひやる庭のよもきのかりそめにかへるさなきつゆのよ
正信直之

いかなる恋の一さとこよみのちかひあるの草まくら
信之朝方
あかつきよあかなはあらし世とよむ恋くちの事のいさよ
瑞をもち之
わたの海やいく浦くまんゑふのあくかるさ中の道ち
備人居之
かりそめのそのあかりせよるしくらんは我方のこといふ
絶而知之
あなしまんのかさしとつれ名をとにいかてかくるし
平帳後之

らし海士のすさみに幾世かは里のあまのかくてやは

雑二十首

暁更寝覚

ゆめさめぬ窓の枕にいとゞなほ寝覚かちなる世のならひ哉

落葉松風

拾ときつる我あとの庭の松かえに風の音そへてよらしき

雨中緑竹

冬ちかみ竹の葉の上のしづくのみふりまさる雨の音のみ聞

浪洗石苔

寄する波の石の白波に苔の上こそ見えぬ

高山待月

山の端の末枕ならぬ秋きくは月をまつ

山中瀧水

やまかせのさそふ山のつれく音のみ瀧のしらなみ

河水流清

秋の水清く瀧河せの中に木の葉ふりかへる

春秋野遊

春秋の野辺に遊ふ袖の小松ましる哉

寒路紅葉

紅葉の秋に色そめし松の秋風

山家秋風 風イ

高ゝる峯乃草木の秋風ハとのましゆふ紫の袖つゝき

山家人稀

なにをとふ人やは人や侘ぬれてしとされハ岑のかけ也

海邊晩空

立ならやたゆふ小舟の流れもかんゆふ小浦のなみのころくと

月前釋中夜

中月に和り和志私そふいく有ゆの夜とふる人

旅宿秋雨

旅衣わくや秋乃とよび秋ハ袖に乱く一夜にしとかさと

海邊暁雲

ゆふくれそこ海りここそかり夜みの星のまたうねよにやそ乃きく

若菜五首

海とろよいつやたゆるゝ夜の中ゆ方をくよ世をくゆる浮すそ

老草木述懐

いきとしいけるものかたゆりかなしきこゝろのなの乃ゆる枝そて

寄木述懐

九重のとのへ乃あてらうるよ高年の夜ハ枝てや枝

逢日懐舊

あま乃との浦れてとにとのかたく一夜まかまうハいゝて海

袪頭穢言

いのちを捨ても洗まてハ穢りつる荒穢ミちかふ民せしくとを

於當館南窓下住宅書之
享禄二年七月十六日
下総介[illegible]

指遣為之草[illegible]状札

右下総介順父奥書分明也尚井厳云々